

道心

禅昌寺通信「道心」第28号

編集 日光山 禅昌寺「道心」編集室
発行 平成20年1月1日
〒732-0002 広島市東区戸坂山根3-2-7
☎082-229-0618 ☎082-229-0822
E-mail : zenshoji@bronze.ocn.ne.jp
ホームページ http://www.zenshoji.org/



改歳之令辰

今年は十二支の始め戊子年ごすねねんに当たり
皆様と共に格別な願いを込めたいと思います。

生きとし生きるものを ささえ養っている
いのちの大地の地の底から
生きとし生きるものを あらしめて
いのちの根っこの声がひびいてくる
ほら、それが、今も、休みなく
あなたの胸の奥の
ドキドキをドキドキさせている
わたしを、
こんなわたしでいいのだろうかど、
しきりに考えさせてくれている、
根っこの声を聞こう
根っこのねがいに耳を傾けて
自分を点検しよう。

この詩は教育者 故東井義雄先生が昭和五十五年頃私宛に下さった、長文の「根っこのねがい」という詩文の最後の部分です。
本年も相変わらず宜しくお願いいたします。

住職 横山正賢 合掌



懺悔すれば 新たな自分に出会える。

修証義 第八節

然しかあれば誠心まことしんを専らもつぱらにして前ぜん仏ぶつ
に懺悔ざんげすべし、慙いん麼もするとき
前ぜん仏ぶつ懺悔ざんげの功德くどく力りき我われを拯すくひて
清浄しじやうならしむ、此この功德くどく能よく
無礙むがいの淨信じやうしん精進しやうじんを生し長ちやうせしむる
なり、淨信じやうしん一現いちげんするとき、自じ他た
同どうく転てんぜらるるなり、其利益そこのりやく普あま
ねく情非情じやうひじやうに蒙こうぶらしむ

この節に述べておられる「懺悔」というのは、日々の行為に対しての反省的な意味ではありません。私に授かっている命の本性は如何に、本心・真心とは如何になどと、自己の心の深奥を御仏に照らして見るといふ、人や自己の感情等にとらわれない、清浄無垢のところしじやうむくで自己じこを返照へんしやうしてみると言うことです。

直訳をしますと

「そうであれば真心を持つて御仏の御前に懺悔しなさい、そうすればその功德の力が働いて我をすくい清浄なら

しむ、この功德は諸々のさまたげを無くして、私の中に具そなわっている清浄信しじやうしんが盛んになつて自分も他人も森羅万象しんらばんしやうが一体となり、その利益を蒙る」と言われるのであります。

私わがが この節から学ぶことは「良きに付け悪しきに付け、人々との出会いに生かされた人生であったことをつくづく感謝しながらも、事事物物との出会い、仕事の時も遊びの時も、楽しい時も辛いときも、その時々を疎おろそかにしないでいか、量り知ることのできない、授かっている命を遺漏いろう無く生き尽くしているか」と問われているように思うのです。

東井義雄先生の「根っこのねがい」これこそこの節に説かれている「懺悔」そのものと言えてでしょう。

.....

※道心二十七号におきまして「懺悔してこそ救われる」としておりました。一般的には「懺悔」と申しますが仏教用語としては「懺悔」と読むのが正しいのです、パソコンを使って文字変換をしますと、「さんげ」では変換しませんので「さんげ」と打ちますと文字変換できるものですかから見過ごしておりました。お詫びして訂正いたします。

お正月の心は、 闇から光への第一歩。

愛知専門尼僧堂堂頭 青山 俊董



『紅白歌合戦』が終つて、除夜の鐘が鳴ると、さあ待ちに待った、お正月——。

まずご家族に「おめでとうございます」とごあいさつをして、それから友人知人にも皆さんごあいさつをなさいますね。

ところで、年の初めを何で「正月」と呼ぶのでしょうか。せつかくのお正月ですから、語源を調べてみましょう。

「正」という文字は「一」と「止」の合字、「一以つて止まる」という説明がありました。さらに「一」を『大漢和辞典』でひいてみますとすばらしい言葉がならんでいます。

第一巻第一頁に「数の一」とあり、次に「二は天を指し、二は地を指す」(易)とあり、「数のはじめ」「物のはじめ」「道・真・善(老子)」と展開します。

さらには「純一無雜」とか「二筋」などと熟語として「まじり気なし」の姿をあらわし、

「二家」「二国」などといつて全体を意味したりもする、とつづきます。

お正月の「正」の字は、天の道、人の道、まことの道に腰をすえ、いかなることがあってもガタガタせず、ここに止まり、これを守りぬいて、生きてゆくことを意味しているのです。

禍福は、あざなえる縄の如し

「今年一年、腹を立てず」と元日の朝に誓いを立て、その日の午後にもう腹を立ててしまったという話を聞いたことがあります。

たとえすぐくずれ去つてもよい、あきらめず、なげやりにせず、姿勢を立てなおし立てなおし、立ち向かっていく。

それが「初心忘るべからず」の言葉でもあり「発心を百千万発してゆけ」という道元禪師のお心でもありましょう。

「初心忘るべからず」といい、ひとたびかかげた灯は消さずに精進するということはすばらしいことですが、どちらの方角に向かっ

てどう歩んでゆくかも、きちんとおさえておく必要があります。

わがままな私の思いを満足させるための、道や真実にそむいた方角に向かつての歩みでは、「一」の心でも「正」の心でもないという事です。

お釈迦さまはある日、祇園精舎を訪れたコラサラ国王に、こう語られました。

大王よ、この世の中には、

四つの種類の人々がある。

闇より闇に赴くひとたち

闇より光に赴くひとたち

光より闇に赴くひとたち

および光より光に赴くものがそれである

人の一生にはいろいろあります。よいことばかりということも、悪いことばかりということも決してありません。

昔から「禍福は あざなえる縄の如し」(史記)とか「禍福門なし、唯人の招く所」(左伝)などと語りつがれているように、大切なのはそれをどう受け止めてゆくかでありましょう。

闇という言葉で象徴されるような悲しい生まれや、育ちや環境や、人生の出来事をはたしなく、さらに悪い方へと育ててしまい、その重みに押しひかれ、出口のないような人生を生きている人もいます。

誰が見ても「これほどのひどい闇はない」と、思うほどにきびしい谷間にあつても、むしろそれゆえにこそ光を求め、闇のおかげと闇を光へと転じて生きている人もいます。

反対に恵まれた環境に生まれ育っているも、たとえば空気の中心にいて空気のありがたさに気づかないように、そのありがたさがわからず、悪い方へ、闇の方へと転落してしまう人もいます。

精神的にも物理的にも恵まれた方が、それを更に育てる方向へ、つまり光より光へと歩んでいる人もいます。

ちなみに、あなたや私は、いったいどんな種類の人に入るのでしょうか。

世の中には 四つの種類の人間がいる

この四つの種類の人の教えには、お釈迦さまの人間観があらわされていて、とても興味深いと思います。そして、そこには見落としてはならない二つのポイントがあることにも気づきます。

一つは生まれとか育つた環境とか能力とかいう「授かり」としかいえないようなことに對しても、動かしがたいもの、固定的なものとして受け止めず、そこにあらゆる可能性を認めてゆこうとする柔軟さがあります。

もう一つは可能性を実現する決定的要素を私たちが「毎日をどう生きるか」の、私たち一人一人の行為に帰しているという点です。

つまり私たちの価値は、生まれや育ちや持ち物ではなく、生き方にあるとし、さらに過去を生かすも殺すも、未来を拓くも閉じるも、今日、この時間の生き方にかかわっているというお釈迦さまの人生観、人間観が、この教えの根底に流れているのです。

同時に受け止める側としての私たちが心せねばならないことは、この四種類の人を他人ごとと思わず、私の中にこの四人がいることを自覚する、という点にあるのではないのでしょうか。

最近「闇から光への歩み」(法蔵館)という本をいただきました。明治四十四年に熊本に生まれた松尾寿城という方の、点字で書いた求道録を墨書したものです。

寿城さんは七人兄弟の六人目として生まれ、目のきれいなことは兄弟一であつたといえます。この寿城さんが三歳の時に高熱を出して、お母さんが解熱剤の調合を誤つて飲ませたばかりに失明してしまいました。お母さんは自分の過失を責めて半狂乱となり、夜も眠れず、瘦せ衰え、死の淵をさまよいつづけます。その果てに寺にたどりつき、命がけの聞法(教えを聞くこと)の日々が始まります。失明したわが子を背負い、何キロもの道を通いつめ、聞法を重ね、教えの力に導かれて少しずつ立ち直り、寿城さんが六歳の頃に、「こうまでなつて私を助けてくれたあんた。マンマンチャン(阿弥陀さま)の、生まれ変わらなければいね。ご苦労かけました」と涙ながらにわが子の頭をなで、わが子を阿弥陀さまと拜むところまで信心は深まつてゆくのです。

闇の極限にあつて、 光に会えた人

このお母さんの信心に導かれ、寿城さんも長じて浄土真宗の教えを深く学び、真宗の僧

として得度を受けました。

その後結婚して四人の子宝に恵まれましたが、その四人を皆んな失い、さらに突発性難聴にかかつて、盲目の寿城さんにとって唯一の外界への窓も閉ざされてしまうのです。

その上、二十二歳から七十二歳までの約五十年間、寿城さんの目となり足となつて支えてくれた奥さんが過労から病床に臥し、盲目と難聴の身でその奥さんを看病なさるかたわら、点字でつづつた求道録がこの「闇から光への歩み」です。

その中で寿城さんは、

「我が苦悩のありつたけを引き受けて、それを光の世界へと転せしめたもうのが、み仏です」

「苦しみに逢つたばに、導きをうけました」

と語っておられます。

寿城さんの生涯ほどに、折り重なる不幸が、闇が、どこにありましよう。そして、だからこそこれほどにまぶしい光もないのです。同様に寿城さんのお母さんも、闇の極限にあつて光に会えた人、闇を転じて光となし得た人でした……

お正月からはじまる一年三六五日という歳のあいだには、雨の日も風の日もありましよう。そんななかで、闇から闇へ、光から闇への歩みだけは避けたいもの。

願わくば仏の縁に導かれ、闇から光への道を歩ませ給えと切に願うことです。

◆道心・趣味の会◆

俳句

- 山門を大きくあけて年迎ふ
- 改年の念誦を堂にあふれしむ

当山二十一世 故甲田蒼水

- 着ぶくれて写経法座に安らぎぬ
- 透きとほるほどに煮込みし蕪かな

東区 青笹 俊枝

◆行事報告◆(十月～十二月)

- 大本山永平寺・奥飛騨・世界遺産
白川郷の旅 十月十七日～十九日
三十名の方が参加され奥飛騨温泉
郷平湯温泉での懇親会(十八日)
は参加者の隠し芸などで楽しい集
いとなりました。

- 臘八摂心坐禅会
十二月一日朝～八日朝まで
毎朝二・三人 毎夜三人～八人が
参加されました。

- 年末大掃除 十二月九日(日曜日)
午後一時半より三時解散

四十数名の参加を得て早めに済み
ました、今年で九年目となり年二
回の諸堂掃除は十八回目となり毎
回出席のお方もあり、来年は十年
目の記念行事となりそうです。参

加者にはお寺からお盆前は腕輪数
珠、年末は今年よりお正月用「福
御簪」が配布されました。



世界文化遺産「ひだ白川郷」にて (平成19年10月18日)

◆年間行事案内◆

- 青山俊董老師講演会

・三月一日(土曜日)
午前十時半～昼迄・午後一時半
～三時迄

参加費 午前午後 各千円

- 春彼岸法要・護持会総会

・三月十五日(土曜日)

午前十時半より法要、法話十二時迄
護持会員は引続き総会・懇親会

- 檀信徒交流会&演奏会

・クラシック音楽演奏会の後懇親会
昨年、若い方のテーブルを設けま
した。一組のカップルが出来ました。
青年の参加をお待ちしております。
五月連休中の予定ですが参加ご希望
のお方は事前にご予約を下さい。詳
しい日程は後日ご案内いたします。

- お盆前大掃除

・七月二十七日(日曜日) 午前九
時半～十一時半迄

- 孟蘭盆会法要

・八月六日(水曜日)
十時半開始～十二時終了
送迎バスを用意いたします。

- 青山俊董老師講演会

・九月三十日(火曜日)
午前十時半～昼迄・午後一時半
～三時迄
参加費 午前午後 各千円

- お月見コンサート

・十月四日(土曜日)
フルート・クラリネット&ピアノ
の三重奏です。詳細は後日ご案内
いたします。

- 檀信徒交流旅行

・皆さんのご意見を拝聴しながら十
一月紅葉の時期に予定しています。

- 年末大掃除

・十二月十四日(日曜日) 午後一
時半～三時までの予定

■毎週定例行事

- 上田宗箇流茶道稽古日

毎月一回 第二又は第四金曜日
の予定 午後二時から
※お抹茶と和菓子を気軽に楽しむつも
りでご参加下さい。

- 御詠歌の会

第二金曜日 午前十時より自主練
習

第四金曜日 午前九時より講師を
招いて練習～昼迄

※茶道の稽古及び御詠歌の稽古は講師
の都合により変更する場合があります。
初めに参加される方は、お寺に
電話にてご確認下さい。

■毎週定例行事

- 暁天坐禅会 月曜日～金曜日

毎朝午前六時～六時四十分迄

- 水曜坐禅会

午後七時より坐禅・茶話会
終了八時半

- 婦人坐禅会 毎週金曜日

午後一時より坐禅・茶話会
終了三時(第一金曜日のみ坐禅の
後、写経・茶話会)

原稿募集

皆様の随筆、旅行記、体験談、趣
味の短歌俳句など何でも結構です。
お寄せ下さい。